HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	江戸時代の文献史料に記載されるツル類の同定 : マナヅル・ナベヅルに係る名称の再考察
Author(s)	久井, 貴世
Citation	研究論集, 14, 55(左)-80(左)
Issue Date	2014-12-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/57691
Type	bulletin (article)
File Information	14_004_Hisai.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

江戸時代の文献史料に記載されるツル類の同定

── マナヅル・ナベヅルに係る名称の再考察 ──

久　井　貴　世

要　旨

江戸時代の文献史料をもとに，史料中に記載されるツル類の名称を整理し，現在の種との関係について検討を行った。これは，文献史料を用いた研究を進めるにあたっての基礎作業として位置付けられる。本稿では，マナヅル *Grus vipio* とナベヅル *G. monacha* に関係する四つの名称を対象とした。〝真鶴〟・〝鶴鶏〟と記載される名称はマナヅルを指し，方言や別名もみられた。〝黒鶴〟・〝陽鳥〟は，およそナベヅルを表わす名称として用いられ，一部でクロヅル *G. grus* を示唆する記述もみられた。〝薄墨〟は淡色化個体やクロヅル，〝霜降鶴〟は交雑種やカナダヅル *G. canadensis* を示す可能性を提示したが，あくまでも推測の域を出ない範囲のものであった。江戸時代には，現代よりも多種多様な名称が存在し，一部では史料によって想定される種が異なるなどの齟齬もみられた。マナヅルとナベヅルを示す名称に関しては大きな混乱は確認されなかったが，〝薄墨〟や〝霜降鶴〟については情報が断片的あるいは曖昧であるため，種を定めることが困難であった。今後新たな情報が追加されることで，より詳細な検討を行うことが可能である。

1．はじめに

名称とは，あるものを識別するための基礎単位であり，あらゆる人々が共通の理解を得るためには，一つのものに対する名称は安定的かつ普遍的であることが望まれる。動物の名称に関しては，19 世紀初期に生じた学名混乱を契機として，現在では『国際動物命名規約』に従って世界共通の学名が規定されている（動物命名法国際審議会 2005）。また，世界共通の学名に対して，日本語による統一名称としては標準和名が定められている。

本稿で分析の対象としている江戸時代の文献史料では，ツル類 Gruidae に関するものだけでも多種多様な名称の記載が確認できる。例えばツルでは，「鶴」・「靏」・「鸛」・「雈」などの数種

の漢字表記がみられ，また特定の種を指して「仙禽」・「袖鶴」・「姉羽鶴」・「朝鮮鶴」・「花頂鶴」など種々の名称が記載されている。ここでは一つの名称が複数の種に対して，あるいは一つの種に対して複数の名称が用いられている場合もあり，たとえ同一の種を表わしている場合であっても，使用する漢字や平仮名，片仮名，読み方の別は史料によっても異なっていることがある。江戸時代の日本の場合，鳥類に関しては当時の西洋や現代とは異なる独自の分類体系が有効に機能していたものの，現代とは異なる体系において記載された極めて多様な名称を，即座に現在の種に対応させることは容易ではない。

現在，日本に生息するタンチョウ *Grus japonensis*，マナヅル *G. vipio*，ナベヅル *G. monacha* では，一極集中化などの問題から生息地の分散が課題となっている（千羽 1996，植田 2009，正富・正富 2009）。自然再生の観点からは，分散にあたっては過去の生息実態を考慮することが望ましいとされる。過去に損なわれた生態系を復元するためには，その地域における生態系の歴史を明らかにすることが必要不可欠であり（日本生態学会生態系管理専門委員会 2005），自然再生事業の初期段階において，十分な資料研究を行うことが重要である（モリソン 2007）。「生態系の歴史」に関する情報は歴史資料から得ることが可能であるが，特に文献史料を使用する際には，文献史料上の名称が現代のどの種に対応するのかを判断することが第一の課題となる。これは，江戸時代の文献史料に情報を求める研究を行うにあたっての基礎的な作業であり，十分に整理を行うことなく史料を安易に利用し立論することは，誤解と混乱を生じさせる要因となる（中林 2007）。史料に記載された情報を正しく理解するためには，史料上の名称と現在の種との関係を十分に整理し，同定する作業が必要である。

史料上の記載から現在の動植物種を同定する研究には，北村（1949，1985），島田（1967a，1967b，1968），水野ほか（1987），宮崎・田代（1992）などがあり，鳥類に関しては，代表として菅原・柿澤（1993）と堀田（2006）が挙げられる。菅原・柿澤（1993）は，奈良時代から江戸時代の文献の記載をもとに，膨大な数の鳥類の名前の由来や変遷をまとめている。また堀田（2006）は，江戸鳥学の到達点ともいわれる堀田正敦の『観文禽譜』を現代語に訳し，その分類について解説を加えている。ただし，これらは鳥類全般を対象とした総合的な研究であり，特定の種に特化した検討を行う本稿とは目的を異にしている。そのため，個々の種に関しては検討の余地が残されている。また，その他の研究においても，史料上のツル類の名称と現在の名称は単線的に結びつけられる傾向があり，史料をもとにした実証的な検討が十分に行われているとはいえない。

筆者は，久井(2013)において，タンチョウに関連する六つの名称について整理，検討を行った。本稿はこれに続くものであり，マナヅル・ナベヅルに関連する〝真鶴〟，〝黒鶴〟，〝薄墨〟，〝霜降鶴〟の四つの名称を対象とした。なお本稿では，菅原・柿澤（1993）や堀田（2006）をはじめ，その他の研究で検討，受容されてきた定義について，原典となる史料の記述に遡り，改めて検討を行うこととする。以上の意図を以て，表題を「再考察」とした。

2．方法

調査は，動植物を扱った江戸時代の本草書や図譜類を主な史料とする文献調査を行った。これらは主に，刊行本のほか，国立国会図書館ホームページのデジタル化資料閲覧サービス（http://dl.ndl.go.jp/），東京国立博物館所蔵博物図譜 Web データベース（http://dbs.tnm.jp/db/kaken/zufu.html），公益財団法人東洋文庫ならびに公益財団法人山階鳥類研究所所蔵の史料を利用した。検索は，件名として「本草」や「動物」，キーワードとして「禽譜」，「鳥譜」，「禽」，「鶴」などの関連する語句を用いて行い，該当したもののうちツル類の記載がある史料を使用した[1]。また，地方名を示す史料として，江戸時代に全国諸領ごとに編集された諸国産物帳[2]を用いた。なお，本稿で使用した史料については表１に概要を掲載した。本文中の各節における史料の初出時には，史料名の後に表１に対応する番号および成立年を付した。

本文中で引用した史料の表記は原則として原文に従うが，句読点と濁点を適宜補った。また，カナ交文のカタカナは平仮名に，合字や変体仮名は通用文字に，旧字体は新字体に改めた。ただし，ツルを表わす漢字に関しては史料上の表記に従った。引用文中の傍線部，および括弧内の記述，平仮名のルビは筆者による補足である。本文中に記載したツルの名称について，史料上の表記の場合は「　」，特定の史料に拠らない江戸時代のツルの名称の場合は〝　〟を付して表わした。なお，北海道大学学術成果コレクション（HUSCAP）では，図をカラー版で掲載している。

3．結果および論議

3-1．真鶴，鶬鷄

3-1-1．マナヅルに係る名称

菅原・柿澤（1993）は，〝真鶴〟および〝鶬鷄〟をマナヅルと同定している。

> 鎌倉時代から〝まなづる〟の名で知られている。〔略〕室町時代の「藻塩草」には，〝まなづる〟一説〝しろづる〟と記されている。江戸時代前期の「本朝食鑑」の「真鶴は頂頸皆白く，頰赤く，觜青く，觜後胸腹に至つて悉く黒し，背より尾前に至るまで灰青色を帯ぶ，尾白く，翎羽みな黒し」の記載はかなり正確である。〔略〕漢名は鶬鷄（ソウケイ）という。

江戸時代の史料においても，菅原・柿澤（1993）が「かなり正確」と評した『本朝食鑑』［6；1697］をはじめ，『和漢三才図会』［9；1712］や『古名録』［33；1843］からも，〝真鶴〟の名称がマナヅルを指していることが確認できる。

表１．本稿で使用した史料の一覧。
完成までに複数年を要している史料については，完成の年を基準とした。

No.	資料名	著者・編者	成立年	分類	出典／請求記号・巻号
1	本草綱目（金陵本）	李時珍[撰]	1596 刊・1607 伝来	本草	国会／205-5
2	新刊多識編	林羅山	1631 刊	本草	国会／特 1-675
3	訓蒙図彙	中村惕斎[編]	1666 刊	図譜	国会／117-18
4	和爾雅	貝原好古	1688 成立	辞書	早稲田／ホ 02-04852
5	頭書増補訓蒙図彙	中村惕斎[編]	1695 刊	図譜	国会／特 1-1940
6	本朝食鑑	人見必大	1697 刊	本草	国会／特 1-2284
7	壱岐国続風土記鈔	(壱岐国)	1700 年代	産物帳	享元／18 巻
8	大和本草	貝原益軒	1708 成立	本草	国会／特 1-2464
9	和漢三才図会	寺島良安[編]	1712 序	本草	国会／031.2-Te194w-s
10	東雅	新井白石	1717 成立	辞書	新井
11	長門産物名寄	(長門国)	1737	産物帳	享元／８巻
12	百花鳥図	余曽三	1737 渡来	図譜	国会／寄別 3-6-3-3
13	庶物類纂	稲若水[編]・丹羽正伯[増補]	1747 増補完成	本草	国会／ふ-2
14	松前志	松前広長	1781 序	地誌	北大／旧記 0626(3)
15	大和本草会識	小野蘭山[述]・寺尾隆純[記]	1780-1783	本草	国会／特 1-1
16	頭書増補訓蒙図彙大成	中村惕斎[編]	1789 刊	図譜	国会／特 1-1614
17	鳥類魚類之画　鳥之部	島津重豪	1800 頃	図譜	山階
18	禽譜(衆芳軒旧蔵)	？	1800 頃	図譜	東洋／五-F-3
19	大和本草批正	小野蘭山[述]・井岡冽[記]	1801 頃？	本草	国会／特 1-92
20	倭朝禽類異名	小野蘭山	1803	本草	国会／わ 488-1
21	本草綱目啓蒙	小野蘭山	1803-1806 刊	本草	国会／特 1-109
22	飼籠鳥	佐藤成裕	1808 序	本草	国会／京乙-344
23	鳥譜写生図巻(衆芳軒旧蔵)	？	1810	図譜	東洋／四-F-6
24	水谷禽譜	水谷豊文	1810 頃	図譜	国会／寅-12，寄別 11-44
25	本草秘訣	？	1826	本草	国立／特 1-3405
26	鳥名便覧	島津重豪	1830 序	本草	国会／特 7-184
27	和訓栞　前編	谷川士清[編]	1777-1830 刊	辞書	国会／837-48
28	啓蒙禽譜	？	1830？	図譜	国会／特 7-117，東洋／三-Ja ろ-68
29	観文禽譜(仙台本)	堀田正敦	1794-1831	本草	図譜
30	唐船持渡鳥類	？	1836	図譜	東博／QB-10256
31	紀伊国続風土記	仁井田好古ほか	1839	産物帳	後期／８巻
32	梅園禽譜	毛利梅園	1839 序	図譜	国会／寄別 4-2-2-4
33	古名録	畔田伴存	1843 成立	本草	正宗
34	三国名勝図会	五代秀尭・橋口兼柄[編]	1843	地誌	後期／17 巻
35	成形図説鳥之部	曽占春ほか[編]	1849 年	図譜	東博／QA-2836
36	華鳥譜	森立之[著]・服部雪斎[画]	1861 序	図譜	国会／寄別 11-3
37	両羽禽類図譜	松森胤保	1883-1893	図譜	酒田
38	伊達治家記録	(仙台藩)	編年史	藩史料	平
39	御後園諸事留帳	(岡山藩)	編年史	藩史料	神原
40	部分御旧記	(熊本藩)	編年史	藩史料	寺本
41	細川家文書	(熊本藩)	編年史	藩史料	熊本
42	対馬宗家文書毎日記	(対馬藩)	編年史	藩史料	小松

※出典略称
国会／国立国会図書館デジタル化資料（http://dl.ndl.go.jp/）.
東博／東京国立博物館所蔵博物図譜 Web データベース（http://dbs.tnm.jp/db/kaken/zufu.html）.
東洋／公益財団法人東洋文庫所蔵資料.
早稲田／早稲田大学図書館古典籍総合データベース（http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html）.
酒田／酒田市立図書館　両羽博物図譜の世界（http://library.city.sakata.lg.jp/matumori/index.html）.
北大／北海道大学附属図書館北方資料室所蔵資料.
山階／公益財団法人山階鳥類研究所所蔵資料.
享元／盛永俊太郎・安田健（編）1985-2003『享保元文諸国産物帳集成』第１巻-第 21 巻，東京：科学書院.
後期／安田健（編）1997-2005『江戸後期諸国産物帳集成』第１巻-第 20 巻，東京：科学書院.
図譜／伊藤圭介（近世歴史資料研究会編）2012『近世植物・動物・鉱物図譜集成』第 17 巻，東京：科学書院.
新井／新井白石（編）・大槻如電（校）1903『東雅』東京：吉川半七.
正宗／正宗敦夫（編著）1936『古名録』日本古典全集，東京：日本古典全集刊行会.
平／平重道（責任編集）1972-1982『仙台藩史料大成　伊達治家記録』1-24，仙台：宝文堂.
神原／神原邦男 1999・2005『御後園諸事留帳』上・中・下巻，岡山：吉備人出版.
小松／小松勝助 1992-1996「対馬産物関係記録―宗家文庫史料」『対馬風土記』28-32.
熊本／熊本大学文学部附属永青文庫研究センター（編）2012『細川家文書　近世初期編』東京：吉川弘文館.
寺本／寺本広作（編）1965『熊本県史料』近世篇第一・二，熊本：熊本県.

真鶴（マナツル）は，高さ四五尺，長け三尺許。頂に無丹，頬赤。全体灰白色，但翎の端，尾の端保呂共に黒して本は皆白。之を鶴の本白と謂。以て箭の羽に造（ハグ），或羽箒に為（ツクル）。之を賞。肉の味，極て美なり。故真鶴と名く（『和漢三才図会』）。

眞名鶴（マナツル）
漢名，鶬鷄。今名，マナヅル。一名，まなつる（『古名録』）。

『和漢三才図会』の「真鶴」は，大きさの表現が若干過大であり，また各部位の色彩表現も大まかではあるが，おおよそマナヅルの特徴を表わしていると理解できる。「翎の端，尾の端保呂共に黒して本は皆白」とは，現代の鳥類図鑑で，黒褐色で基部は白色を帯びる（清棲 1978）と記載される通りである。下坂（2009b）が「羽箒に使われる（マナヅルの）風切羽や尾羽は，根元は白っぽく先に行くほど黒くなって」おり，「古い羽箒にはマナヅルによく似た羽をよく見かけます」と述べていることから，「羽箒に為」の記述が適切であることもわかる[3]。なお，『成形図説鳥之部』［35；1849］では，『本朝食鑑』に劣らない正確な特徴の記載と図が掲載されている（図１）。

大さ丹頂より殊に小く，背青して黄色を帯び，脚淡赤なり。額より頬まで丹く，目黄なり。惣身灰色にして，蒼みをおべり。咽より後下に至りて其色深し（『成形図説鳥之部』）。

本書では，虹彩の色が黄色であることまでを正確に記している。マナヅルの図に関しては，『唐船持渡鳥類』［30；1836］に非常に写実的な「鶬鷄」が描かれている（図２）。背から尾端にかけての色調の変化や，耳羽の後端にある灰色の斑紋など，マナヅルの特徴をよく表わしてい

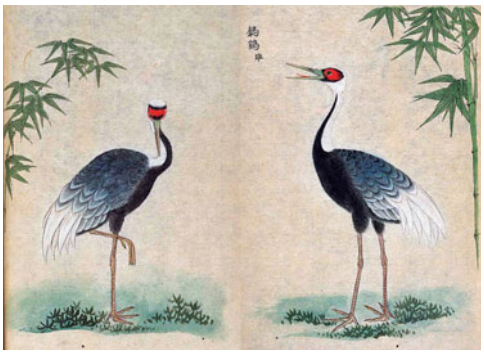

図１．『成形図説鳥之部』の「鶬鷄」二幅（東京国立博物館所蔵）

図２．『唐船持渡鳥類』の「鶬鷄」（東京国立博物館所蔵）

るといえる。『唐船持渡鳥類』は，唐船や阿蘭陀船によって長崎に輸入された鳥を描いたものであり，ここに描かれる「鶴鷄」も中国もしくはオランダより持ち込まれた舶来品である。マナヅルは日本に多く生息するが，『華鳥譜』［36；1861］にも「朝鮮・琉球の産，多くは是（マナヅル）なり」と記されている通り，当時は国内外からマナヅルを移入していたと推測できる。

『古名録』では，古名の「眞名鶴」は現在の名称では「マナヅル」あるいは「まなつる」で，漢名として「鶴鷄」を挙げている。同様に『鳥名便覧』［26；1830］では，「マナヅル」を和名，「鶴鷄」を漢名として記載している。『新刊多識編』［2；1631］も「鶴鷄（サウケイ）」と音読していることから，漢名として記していると推測できる。一方で，『成形図説鳥之部』では，初出こそ和名に対応させる形で「鶴鷄」を記しているが，初出以降は「鶴鷄」の名称に直接「マナツル」の傍訓を付している。『和爾雅』［4；1688］や『大和本草』［8；1708］，『本草綱目啓蒙』［21；1806］なども同様である。『啓蒙禽譜』［28；1830］などでは，和名と漢名の区別なく，あくまでもマナヅルを表わす名称の一つとして「鶴鷄」が記載されている。他の史料中にも，マナヅルに対して〝鶴鷄〟の表記を用いるものが多く確認できる。したがって，本来〝鶴鷄〟とは漢名ではあるものの，江戸本草学においてはマナヅルを表わす表記の一つとして，広く用いられていたと考えられる。

また，『訓蒙図彙』［3；1666］は，「鶴鵠（そうかつ）」の名称を用いて「まなづる」，「鶴鷄」を説明している。

> 鶴 鵠（サウクワツ）
> まなづる，鶴鷄（サウケイ）也。亦，但鶴と称。又槀鵠（ヒクワツ），鵠鹿（クワツロク）と名（『訓蒙図彙』）。

図 3．『訓蒙図彙』の「鶴鵠」（国立国会図書館所蔵）

「鶴」と「鵠」は共にマナヅルの意味を持つ漢字であり，「鶴鵠」もまた漢名の一つである。本書『訓蒙図彙』は，その後普及版の『頭書増補訓蒙図彙』［5；1695］，大成本の『頭書増補訓蒙図彙大成』［16；1789］が刊行される。解説の文言は版を重ねてもほぼ変わらないが，図は『頭書増補訓蒙図彙大成』で新刻され，無彩色ではあるが眼の周囲や頸・腹部を濃色で描いている点などから，マナヅルの特徴を表現したものであると推測できる（図 3・図 4）。

図 4．『頭書増補訓蒙図彙大成』の左「鶴鵠」（国立国会図書館所蔵）

なお，『和漢三才図会』には「真鶴」という名称の由来についての言及があり，語源に関しては『東雅』［10；1717］と『庶物類纂』［13；1747］にも類似の記述がある。

古語魚菜の類，すべて食ふべき者をナと云ひけり。後に菜をナといひ，魚をマナといひし，即是也。酒肴をサカナといひしも，又此義なり。鶴鴇をマナツルと云ひしも，その鶴の煮て食ふべきものなるを云ひしに似てけり（『東雅』）。

本草綱目（ほんぞうこうもく）単に鶴と称すは丹頂也。我邦古（いにしえ）丹頂無き故，鶴鷄を以て真鶴と為し，罵拿紫（マナツル）而と訓す。凡（およそ）薬食に供する上好の物，真の字を加えて罵と訓す（『庶物類纂』）。

『和漢三才図会』では，「真鶴」の名は「肉の味，極めて美」なることに由来するとし，『庶物類纂』では，「真」の字を冠すのはマナヅルが「薬食に供する上好（最上）の物」であるためとしている。『東雅』では味については言及せず，「食ふべきもの」の意と結び付けている。マナヅルを食用のツルの代表として位置付ける記述は，「今食用の鶴肉は皆此鳥（このとり）なり」（『水谷禽譜』[24；1810]），「食用に処充之（あてるところの）マナツル也」（『本草秘訣』[25；1826]）などに確認できるが，一方で「其味亦黒きに次げり。中品（ちゅうぼん）と為」（『大和本草』）あるいは「今食用の鶴肉は皆此鳥なり。然（しかれ）ども味は黒ヅルに次ぐ中品なり」（『本草綱目啓蒙』）など，あくまでも「黒鶴」（ナベヅルを指す）より下位であるとする記述もみられる。食肉としての序列の実際は定かではないが，〝真鶴〟の名称は食用ツルの代表としての位置付けに由来するとの考えが主流であったといえる。あるいは，『庶物類纂』の「我邦古丹頂無き故，鶴鷄を以て真鶴と為し」とあるように，代表的な「鶴」の名称としての〝真鶴〟，すなわち〝真（しん）の鶴〟という考え方も一部でみられている。

さらに，菅原・柿澤（1993）は「〝まなづる〟には〝ねづみつる〟の異名があり，方言として〝なべづる〟（水戸）〝まなとり〟（松前）がある」とし，マナヅルには別名あるいは方言名があったことに言及している。史料中では，『本草綱目啓蒙』・『水谷禽譜』・『啓蒙禽譜』・『観文禽譜』[29；1831]・『華鳥譜』[36；1861] などに〝ねづみづる〟と，「水戸方言」として〝なべづる〟，『倭朝禽類異名』[20；1803] で「松前方言」として〝まなとり〟の別名を確認した。〝ねづみづる〟は，明治時代にはクロヅル *G. grus* の名称として用いられていた（岡田 1891；長濱 1893）ことが確認できるが，江戸時代にはマナヅルの別名としても知られていたのであろうか。〝なべづる〟の名称に関しては，ナベヅルを指す以外に，黒田（1934）がマナヅルの漢名として「鍋鶴」を掲載している。「水戸方言」の〝ナベヅル〟は，黒田（1934）が記すところの漢名「鍋鶴」の意であろうか。また，『松前志』[14；1781] では「蒼鶴」の名称がみられる。

蒼鶴は即ち鶴鶴にして，丹頂に並て其体大に，両頬赤し。倭俗真鶴と云ふ。和歌にマナツルとよめるも是なり（『松前志』）。

当時蝦夷地（北海道）では，「此禽（ツル類）わきて多し」といわれ，「白鶴あり，蒼鶴あり，黒鶴あり，丹頂殊に多し」との記録が残されている（『松前志』）。このうち「蒼鶴」は，同史料

中の「鶺鴒」・「真鶴」・「マナツル」の名称が示す通り，マナヅルに該当する。「蒼鶴」の名称は，中国の本草書『本草綱目』[1；1596] に「鶴に白有り，玄有り，黄有り，蒼有り」と記され，『観文禽譜』ではここでいう「蒼」に「マナツル」を充てている。薩摩・大隅・日向三国の地誌である『三国名勝図会』[34；1843] にも「蒼鶴」の記載が確認できる。『庶物類纂』にも「古人又陽烏・鶺鴒を以て玄鶴・蒼鶴と為し，則ちこれ亦自ずから一種の鶴也」とあるが，「古人（昔の人）」と記されていることから，「蒼鶴」は古い名称であるような印象を受ける。マナヅルは「色青し」（『大和本草』）あるいは「灰色微青」（『水谷禽譜』）などとも表現される通り，青みがかった体色が「蒼鶴」の由来であると考えられる。

3-1-2．二種の〝まなづる〟

以上のように史料中には，マナヅルという一種を指す名称として複数の別名が記されている。一方で，〝まなづる〟自体に「二種」のツルが存在すると考えるものも多く確認できる。

> 此に二品あり。筑前，伊代，三作，備前，加賀の産は青蒼色（アイネヅミイロ）にして，時珍の説に合ふ。水戸の産は背灰色，腹に微青あり，ナベヅルと呼。江戸の産は灰色なり。亦灰色者有と云，是なり。ネヅミヅルと呼ぶ。即百鳥図の灰鶴なり（『本草綱目啓蒙』）。

> 鸛に似て頂丹からず。頰赤し。灰色にして，青色を帯ぶ。西国に多し。江戸に有る物灰色にして青み無し。集解に有，灰色の者と云者即是也（『本草秘訣』）。

> 蒼色・灰白の二種ありて，東国の品は灰色なり（『和訓栞』[27；1830]）。

『本草綱目啓蒙』によると，「鶺鴒」には「筑前，伊代，三作，備前，加賀」および「水戸の産」とされる「青蒼色」の種と，「江戸の産」とされる「灰色」の種の「二品」があることが示されている。水戸のものは「ナベヅル」と呼ばれているとあり，これは先述の「水戸方言」のことである。一方「灰色」のものは「ネヅミヅル」と呼ばれ，これは「百鳥図の灰鶴」と同一であるという。『本草秘訣』と『和訓栞』の記述も併せると，およそ灰蒼色は「西国」の品，灰色は「東国」の品と分類できるようだ。しかし，マナヅルには亜種は知られていないため，堀田（2006）は，「蘭山がこのツルに二品あるとしているのは，写生図で比較したための誤った判断」の可能性があると推測している。確かに，マナヅルを描いたいくつかの図を比較してみると，例えば図 5 と図 6 でも青みが強いものと，青みが無くより黒色に近いものとで，史料による誤差が見受けられる。したがって，マナヅルの「二品」とは，ツルの個体差という要素が関係しつつも，史料上の色彩表現の相違から生じた誤差であると考えられる。

しかしながら，「二品」の区別には明確な特徴と地域区分があることが確認できるため，色彩表現の相違が原因による齟齬であるとする以外に，他の異なる要因についても考えてみたい。

まず，「二品」のうち「青蒼色」の種については，マナヅルの色彩表現に青色が用いられることは「蒼鶴」の項で言及した通りであり，さらに「水戸方言」の「ナベヅル」はマナヅルの漢名「鍋鶴」の意である可能性があることを加えると，「青蒼色」の種は通常通りのマナヅルを指していると推測できる。それでは，もう一方の「灰色」の種とは何を指すのであろうか。

図５．『禽譜』の「真鶴」（(公財)東洋文庫所蔵）

図６．『華鳥譜』の「まなつる」（国立国会図書館所蔵）

先の『本草綱目啓蒙』によると，これは「百鳥図の灰鶴」であるとされている。「百鳥図の灰鶴」とは，『百花鳥図』［12；1737］の「灰鶴」のことであり（図７），これを堀田（2006）は「あまり正確とはいえないが，羽色や脚の色，頭の赤のパターンの出方などから，ほぼマナヅルの成鳥と判断できる」と解釈している。確かに，頬だけでなく頭頂まで赤色である点などを除けば，およそマナヅルの特徴を示しているといえる。しかし，「灰色にして青み無し」という「灰色」の種を表わすには，『百花鳥図』の「灰鶴」は青みを帯びすぎているように感じられる。これは『百花鳥図』の描写の問題である可能性もあるため，次に「灰鶴」という名称についてみていくこととする。

図７．『百花鳥図』の「灰鶴」（国立国会図書館所蔵）

マナツルに二種あり。色は蒼黒きあり。皆鶴鷄也。灰色のマナ鶴も鶴鷄の一種にして漢名灰鶴也（『大和本草会識』［15；1783］）。

二種ともマナヅルであるが，「灰色のマナ鶴」は「鶴鷄の一種」で，漢名が「灰鶴」であるとされる。ここでいう「灰鶴」については，『大和本草』と『大和本草批正』［19；1801］に記述がある。

マナツルは色青し。其大さ黒鶴より大なり。其味亦黒きに次げり。中品と為。范成大か虞

衡志に曰，灰鶴。大さ鸛の如し。通身灰慘色，頂去二寸許毛純赤（『大和本草』）。

〔マナツル〕鶺鴒なり。淡青黒色。クロヅルより大なり。味は本ツルに優る。虞衡志の灰鶴はシヤムロツルなり。マナツルに非す。然れども百鳥図に灰鶴はマナヅルなり。同名二物と思ふべし（『大和本草批正』）。

『大和本草』に「虞衡志」とあるのは，中国の地誌『桂海虞衡志』のことである。『大和本草批正』では，この「灰鶴」は「シヤムロツル」であり「マナツル」ではないと述べている。「シヤムロツル」は当時〝暹羅鶴（しゃむろつる）〟と呼ばれたオオヅル *G. antigone* の亜種ヒガシオオヅル *G. Antigone sharpii* である（堀田 2006）。オオヅルとはその名の通りツルの中でも大型の種であるが，久井（2013）は，本草学者はマナヅルとヒガシオオヅルの大きさの違いを認識した上で，色調が相似する両者を同類とみなしていたと推測している。つまり，「鶺鴒の一種にして漢名灰鶴」，すなわち「灰色のマナ鸛」はヒガシオオヅルを指していたのではないかと考えられる[4]。

ただし，〝暹羅鶴〟は名にシャムロとある通り，タイやミャンマーなど東南アジアに生息する種であるため（茂田 1991），日本の野生下では生息していないはずである。日本への渡来方法としては，『東雅』が述べているように，外国船による移入が考えられる。

此物（灰鶴）を海舶の載せ来れるを見し事もあるなり。志（桂海虞衡志）にしるせし所に違う所もなし。俗には暹羅鶴といふ，即是也（『東雅』）。

舶来品として江戸の幕府へと献上された「灰鶴」が，「二品」の〝まなづる〟のうちの「江戸の産」と位置付けられたと考えるのは，些か無理があろうか。

今按ずるに，朱舜水もマナヅルを灰鶴に充て(談綺)，又時珍も亦灰色の者有りと云ひ(集解)，及百鳥図の灰鶴我邦のマナ鶴に聊差ふことなければ，唐山にて常に灰鶴とも称すとみへたり。〔略〕又宋の范成大が桂海虞衡志の灰鶴はシヤムロ鶴によく合す。亦同名異種なり（『観文禽譜』）

『大和本草批正』や『観文禽譜』では，『百花鳥図』の「灰鶴」はマナヅルであり，ヒガシオオヅルを指す『桂海虞衡志』の「灰鶴」とは「同名異種」であると解釈している。このように，マナヅルの項に記載された全ての「灰鶴」が同一種を表わすとは限らないため，「灰鶴」が内包する揺らぎを認識した上で，個々の史料ごとに考察を進める必要がある。

例えば『飼籠鳥』[22；1808] の「灰鸛」は，形態的な特徴の記述などから，おそらくマナヅルを指していると推測できる。

灰鸛　和名タヅ，古名マナツル
古へより単に鸛と云此灰鸛なり。本朝食鑑にも眞鶴（マナ）と書く。方土の方物には此種を用ゆ，又食料にも是れなり。諸州共に在り。しかれども西土には少く，関巳東には多く来る。何国にても秋彼岸の比に盛に至る。其形状都而大にして首白く，目赤く，目辺に赤毛あり，背は鼡色に，脚高く色赤し。本朝食鑑に頂頸皆白く，頰赤し，觜青く，觜後より胸腹悉く黒く，背より尾前に至て灰色に青を帯ふ，尾白，翎羽皆黒し（『飼籠鳥』）。

赤頰　和名マナ，九州方言アキマナ
西土には毎歳来る。土俗是をマナと云。灰鶴の真鶴なき故なり。其形状大抵同して，背蒼黒に灰鶴と同じからづ。しかれども灰鶴の一種也（『同上』）。

「灰鸛」は「関巳東」に多く，「西土」に毎年来るのは蒼黒色の「赤頰」とあるのは，先述してきた「東国」の灰色と「西国」の灰蒼色の分類とよく似ている。しかし，「灰鸛」の形態として記述されている特徴はおよそマナヅルに該当し，さらにここで引用されているのは『本朝食鑑』のうちのマナヅルの説明である。したがって，本書の「灰鸛」は通常のマナヅルを指していると考えられる。一方の「赤頰」については，形態がおおよそ同じであることや，当時マナヅルは西日本･東日本の区別無く日本全域に広範に渡来していた（久井 2011）ことを考慮すると，これも「灰鸛」と同様にマナヅルを指していると推測する。

以上の通り，史料中に〝真鶴〟や〝鶴鷄〟などと記載される種は，現在のマナヅルであることが確認できた。〝鶴鷄〟は本来は漢名であるが，江戸本草学においてはマナヅルの名称の一つとして特段の区別なく用いられていたと考えられる。また，「二種」のマナヅルの存在に関しては，史料上の誤差，あるいは実際の種の違いなどの可能性が考えられるが，マナヅルには亜種が知られていないことや，当時のマナヅルの分布域が日本全域に広がっていたことに留意すると（久井 2011），少なくとも日本の東西で渡来する種が異なっていたとは考えにくい。一方で，舶来品として移入されたヒガシオオヅルを「鶴鷄の一種」として位置付ける考えもみられるため，これが「二種」の区別に関係していると推測できる。

3-2．黒鶴，陽烏

3-2-1．ナベヅルに係る名称

菅原・柿澤（1993）は，〝黒鶴〟，〝陽烏[5]〟について，それぞれ以下の通り記している。

島津重豪の「鳥類写生図」他三図譜の〝くろづる〟の図はナベヅルである。〔略〕江戸時代前期の「大和本草」には，鸛の項に「黒き者形小也，足も亦黒し」，中期の「観文禽譜」，後期の「本草綱目啓蒙」には，漢名，陽烏，和名〝くろづる〟，異名〝きぬかづき〟として，

形状の記載がある。江戸時代後期には，〝なべづる〟の名でも呼ばれるようになり，一方，クロヅルが〝くろづる〟の名で知られるようになった。

「梅園禽譜」と「成形図説鳥之部」の陽鳥の図はナベヅルである。わが国で古くから〝くろづる〟といっていたのはナベヅルである。

菅原・柿澤（1993）が挙げる『鳥類写生図（鳥類魚類之画　鳥之部）』[17；1800]（図 8），『梅園禽譜』[32；1839]（図 9），『華鳥譜』[36；1861]（図 10）の〝黒鶴〟と，『成形図説鳥之部』[35；1849]（図 11）の〝陽鳥〟は，暗灰色の体や白色の頸部，黒毛混じりの赤色の前頭などからナベヅルの特徴を表わしているといえる[6]。『本草綱目啓蒙』[21；1806] の記載からも，ナベヅルの特徴を読み取ることができる。

形鶴鶏より小く，頂は赤褐色，項背白色，胸より全身尾脚皆淡黒色。觜は微短，青黄色。鳴声は丹頂に似たり。肉味佳なり。鶴類中の上品とす（『本草綱目啓蒙』）。

図 8．『鳥類魚類之画　鳥之部』の「くろつる」（(公財)山階鳥類研究所所蔵）

名称については，『本朝食鑑』[6；1697]・『倭漢三才図会』[9；1712]・『大和本草会識』[15；1783]に〝黒鶴〟，『倭朝禽類異名』[20；1803]・『水谷禽譜』[24；1810]・『古名録』[33；1843]・『華鳥譜』に〝くろつる・くろづる〟とその別名（あるいは漢名）として〝陽鳥〟，『本草綱目啓蒙』・『啓蒙禽譜』[28；1830]・『成形図説鳥之部』に〝陽

図 9．『梅園禽譜』の「陽鳥」（国立国会図書館所蔵）

図 10．『華鳥譜』の「くろつる」（国立国会図書館所蔵）

図 11．『成形図説鳥之部』の「陽鳥」（東京国立博物館所蔵）

烏〟とその別名（あるいは和名）として〝くろつる・くろづる〟が記されている。〝黒鶴〟と〝陽烏〟は和名と漢名で区別するものもあるが，前節の〝真鶴〟と〝鶴鷄〟の関係と同様に，両者が共にナベヅルの名称として広く用いられていたと推測できる。なお，『観文禽譜』[29；1831]には漢名として「陽烏」と「陽鴉」が挙げられている。稀に「陽烏（ようう）」を「陽鳥（ようちょう）」と記すものも確認できるが，「陽鴉」の異字から推察すると，やはり「烏」の字を用いることが正確であると考えられる。

また，『大和本草批正』[19；1801]・『倭朝禽類異名』・『本草綱目啓蒙』・『飼籠鳥』[22；1808]・『水谷禽譜』・『本草秘訣』[25；1826]・『啓蒙禽譜』・『観文禽譜』には〝きぬかつき・きぬかづき〟の名称が確認できる。〝きぬかづき〟は〝衣被（きぬかず）き〟の意であると考えられ，平安時代以降の貴婦人が外出時に顔を隠すために頭からかぶった衣，またはそれをかぶった女性のことをいう(『広辞苑』)。おそらく，ナベヅルの頸から上部が白色である様子を，衣を被った姿に見立てたのであろう。『倭朝禽類異名』・『本草綱目啓蒙』・『観文禽譜』には「松前方言」として〝うしづる〟，『両羽禽類図譜』[37；1893]には「出羽方言」として〝牛鶴〟が記載されている。語源は不明であるが，北日本にはナベヅルを表わす〝うしづる〟という呼称が存在していた可能性がある。なお，ナベヅルに対する〝なべづる〟の名称は，『飼籠鳥』に「ナヘツル」，『観文禽譜』に「なべつる」がみられる。『観文禽譜』の「なべつる」は「仙台方言」であると記され，「真鶴と同名」とあるのは前述したマナヅルの「水戸方言」を指していると考えられる。しかしながら，史料上の記載の頻度から推測すると，現在の標準和名であるこの名称は，当時はまだあまり一般的ではなかったようだ。

3-2-2．ナベヅルとクロヅル

また，クロヅルを〝黒鶴〟と呼ぶようになったことについては，菅原・柿澤（1993）は以下のように述べている。

> 江戸時代にも渡来し，衆芳軒旧蔵の「禽譜」，「啓蒙禽譜」の〝くろづる〟はクロヅルである。
>
> 「唐紅毛渡鳥写生帖」他二図譜の陽鳥の図はクロヅルである。

『禽譜』[18；1800]（図 12）と『啓蒙禽譜』(図 13)の二つの図[7]のうち，前者についてはおよそナベヅルの特徴を示していると推測できる。一方，

図 12.『禽譜』の「陽烏」((公財)東洋文庫所蔵)

図 13.『啓蒙禽譜』の「陽烏」((公財)東洋文庫所蔵)

後者については腮（顎）の辺まで黒色が広がっている点や，背部と腹部の濃淡が顕著に異なる点など，ナベヅルの特徴としては適当ではない表現がみられる。しかしながら，同時代の他史料に比べて本図に特段の誤りが指摘できるというわけではなく，表現上の誤差として理解できる範囲のものである。これらをクロヅルと見なすには，特徴的な喉や前頸，後頭の黒色が描かれていないのは不自然であり，クロヅルというよりはナベヅルを描いたものであるという印象を受ける。さらに図 13 は，図 9 に挙げた『梅園禽譜』の「陽烏」の図に相似しており，久井(2013)はこれらのどちらかが転写であると推測している[8]。もしも転写が事実であるならば，両図を以てそれぞれを異なる種に同定することは適切ではない。

なお，菅原・柿澤（1993）は，ナベヅルが江戸時代後期に〝なべづる〟の名で呼ばれるようになった根拠として，『鳥名便覧』[26；1830] を挙げている。

> ツル　漢名鶴。番名カラーンホーゴル。
> 属品○丹頂。漢名丹鶴。○白鶴，和漢通称。○クロヅル。漢名陽烏(ママ)。○マナヅル。漢名鶬鷄。○ア子ワヅル。○ナベヅル。漢名灰鶴。（『鳥名便覧』）

ここでは確かに，漢名が「陽烏(ママ)」の「クロヅル」と，漢名が「灰鶴」の「ナベヅル」とが共に記載されている。菅原･柿澤（1993）はこの「ナベヅル」をナベヅル，「クロヅル」をクロヅルに同定したものと推測する。先述したように，ナベヅルを指す〝なべづる〟の名称は，江戸時代の史料中にも少数ながら確認できる。しかしながら，これまでみてきた通り，「陽烏(ママ)」の名称はナベヅルを表わすものとして用いられていたことから，ここでいう「クロヅル」はナベヅルを指した名称と考えることが適当であろう。それでは，もう一方の漢名「灰鶴」の「ナベヅル」とは何を表わしたのだろうか。黒田（1934）は，クロヅルの漢名の一つとして「灰鶴」を記載している。黒田（1934）と『鳥名便覧』では成立した時代が全く異なるため，直線的に結び付けることはできないものの，『鳥名便覧』の「ナベヅル」，漢名「灰鶴」はクロヅルを表わしたという一つの可能性を提示することができる。

さらに，『両羽禽類図譜』では次のような記述がある。

> 鶴種に数品あり。然ども我が土に来るものは，真な鶴，牛鶴，丹頂，鍋鶴，袖鶴などと，称するものの外は予未だ之(これ)を聞かず（『両羽禽類図譜』）。

ここでは，出羽国に渡来する種として「牛鶴」と「鍋鶴」の二つの名称が確認できる。先述した通り，本史料の「牛鶴」は「出羽方言」でナベヅルを表わすため，「鍋鶴」はナベヅルではないことが明らかである。『本草綱目啓蒙』や『観文禽譜』では，マナヅルを表わす〝なべづる〟という名称が「水戸・仙台方言」として記載されているが，本史料ではマナヅルに該当するの

は「真な鶴」であると推測できる。そのため，ここでいう「鍋鶴」とは，ナベヅルとマナヅル以外の種を指す可能性が高く，先述の『鳥名便覧』の事例を鑑みると，クロヅルを表わしたものとも考えられる。

なお『飼籠鳥』には，「クロトリ」という和名を持つ「陽鳥(ママ)」について以下の通り記述がある。

> 陽鳥(ママ)，一名陽鴉，和名クロトリ。
> 先年薩州の田布施と云処に来る。其形状鶴のごとし。全身真黒にして首長く，灰白なり。土人此名をしらづ。故にクロトリと云。鸛と異るに五穀を食ふ故に，鶴に近しと云。

本種は，「鸛」（コウノトリ *Ciconia boyciana* を指す）と「烏鸛」（ナベコウ *Ciconia nigra* を指す）の次に記載されているが，「鸛と異るに五穀を食ふ故に，鶴に近し」と記され，形状も「鶴のごとし」といわれている通り，これはツルの一種であると考えられる。「陽鳥」・「陽鴉」の名称からはナベヅルが想定されるものの，「先年薩州の田布施と云処に来る」，さらに「土人此名をしらづ」との記述が示すように，地元の人々も見たことがない極めて稀な種である印象を受ける。一方のナベヅルは「諸州共に群来る」といわれる一般的な種であり，「クロトリ」が渡来した薩摩国と同様の薩摩藩領である大隅国でも「数百群を為して」来ると記されている（『飼籠鳥』）。そのため，極めて稀な種と考えられる「クロトリ」は，ナベヅルには該当しないと推測する。なお，『観文禽譜』には次のような記述がみられる。

> これ（琉球づる）を薩の老侯に問に，琉球には総て鶴なし。〔略〕然るに以前国にて黒ヅルより稍大く，頸すじ白黒，丹頂に似たる鶴を見しことあり。名もしらざりしが，もしくはこれ等を大和本草に載しにやと答らる。

以上は，『観文禽譜』の著者である堀田正敦が，『大和本草』［8；1708］に記載されている「琉球づる」[9] について薩摩藩主の島津重豪に尋ねた際の話である。ここに記されている，島津が以前国で見たという名前がわからないツルとは，『飼籠鳥』にある「クロトリ」のことではなかろうか。時期・地域共に大きな齟齬はない。これらがもし一致するのであれば，島津が見たという「丹頂に似たる鶴」とは，記載される特徴からクロヅルであると推測でき，「クロトリ」はクロヅルを指していたことが想定できる。堀田（2006）も，島津の見たツルをクロヅルだと推測している。「黒ヅル」（ナベヅル）が大きさの比較対象として挙げられている点は，内田・下村（1932）のクロヅルの項に「大体ナベヅルに似た鶴であるが，少しく大である」という記述に，「丹頂に似たる鶴」とは鷹司（1917）の「形丹頂に似て稍小さく」との記述にも共通する。また，「灰白」と表現される「クロトリ」の体色は，黒田（1934）のクロヅルの項にある「淡灰鼠色」に相似する。以上のことから，薩摩国に渡来した「クロトリ」はクロヅルを指した可能性が考

えられる。

なお，島津重豪は晩年の文政十三（1830）年に『鳥名便覧』を著わしている。本史料には，漢名が「灰鶴」の「ナベヅル」という種が記載されており，先述した通りこれはクロヅルであろうと推測できる。薩摩国で「クロトリ」が確認されたのは『飼籠鳥』が完成した文化三（1806）年より以前であり，それを見た島津は後に堀田の質問に対して「名前を知らない」と語っている。堀田の『観文禽譜』は，寛政六（1794）年～文政十四年(1831)年という長い編集期間を持っており，どの時点で島津への聞き取りが行われたかは定かではない。しかしながら，堀田の聞き取りの時点では，島津にとってクロヅルは〝名前がわからないツル〟であったが，『鳥名便覧』を著わす段階では，これを「ナベヅル」・漢名「灰鶴」に分類したという想像ができる。

図 14.『鳥譜写生図巻』の「黒霍」((公財)東洋文庫所蔵)

加えて，『鳥譜写生図巻』[23；1810]に描かれた「黒霍」には，「背羽共薄藍鼠色，但鼠がち」，三列風切羽辺には「クマより墨」と記されている（図 14)。「鼠がち」な「薄藍鼠色」は，「体は淡い青灰色」（茂田 1991）の表現に近く，「クマ（隈）より墨」と記されている三列風切羽は先端が黒色で描かれ，この描写は「色は淡い灰鼠色で，先端は光沢のある黒色」（清棲 1978）にも通ずる。これらの表現はクロヅルのものであり，図 14 の彩色が不完全であることが悔やまれるが，頭部の黒色の様子からはナベヅルというよりもクロヅルを表わしているように思われる。菅原・柿澤（1993）が同定した通り，『鳥譜写生図巻』の「黒霍」はクロヅルを表わすと推測できる。

また，『本草綱目啓蒙』や『観文禽譜』などには，〝玄鶴〟という名称が記載されている。「玄」とは黒の意であり（吉岡 2000)，〝玄鶴〟は〝黒鶴〟の書き換えであるとも考えられる。しかし，『本草綱目啓蒙』などではナベヅルは「陽鳥，クロヅル」として別項が設けられているため，この場合の「玄鶴」はナベヅルとは別種であると推測できる。堀田（2006）は，〝玄鶴〟はマナヅルとも，ナベヅルとも，ナベコウであるともいわれ，諸説が一定しておらず，〝玄鶴〟が指す種を同定することは困難であると述べている。一方で，『松前志』[14；1781] では「黒鶴は玄鶴にして，方俗云牛鶴是なり」と記し，「黒鶴」と「玄鶴」は同一であることが示されている。仙台藩の『伊達治家記録』[38] や岡山藩の『御後園諸事留帳』[39]，『壱岐国続風土記鈔』[7；1700]，『三国名勝図会』[34；1843] などでも，〝玄鶴〟の名称が用いられている。これらのような江戸本草学の学術書ではない，藩政史料や産物帳・地誌など地域史料の記述では，地域の実態に則した語彙が選択されていると推測される。そのような場面では，諸説が一定しない不安定な名称である〝玄鶴〟を用いるとは考え難く，地域史料中に記載される〝玄鶴〟に関しては，黒の意を有する「玄鶴」と「黒鶴」の意図しない書き換えであると考える。

以上の通り，江戸時代のナベヅルの名称としては〝黒鶴〟と〝陽烏〟が多く用いられ，和名としては〝きぬかづき〟も記載されている。また，方言としては北日本で〝牛鶴〟の名称が確認できたが，語源は明らかでない。菅原・柿澤（1993）は「江戸時代後期には，（ナベヅルが）〝なべづる〟の名でも呼ばれるようになり，一方，クロヅルが〝くろづる〟の名で知られるようになった」と述べているものの，本研究ではそのような明確な傾向は確認できなかった。〝なべづる〟の名称は，地域や史料によってナベヅル・マナヅル・クロヅルの三種に対して混合的に用いられており，なかにはクロヅルを指したと推察される「ナベヅル」の事例も確認できる。江戸時代後期にはクロヅルが〝くろづる〟として知られるようになった（菅原･柿澤 1993）というよりも，ナベヅルに関連する名称にクロヅルが混入し始めたという考え方が適当であると考える。

3-3．薄墨

現在では，ツルの名称で〝薄墨〟という表現が入るものは存在していない。一方，江戸時代では，〝薄墨〟という名称は『倭漢三才図会』[9；1712]・『本草綱目啓蒙』[21；1806]・『水谷禽譜』[24；1810] などに記載がある。

一種同黒鶴に而色淡き者を薄墨と名く（『和漢三才図会』）。

一種色浅き者をウスズミと云ふ（『本草綱目啓蒙』）。

ウスズミ
クロツルの一種。色浅きもの（『水谷禽譜』）。

これらの史料では，〝薄墨〟について〝陽烏〟あるいは〝黒鶴〟の項で言及しており，『水谷禽譜』にあるように「クロツルの一種」，すなわちナベヅルの属であると位置付けている。しかし，ナベヅルに亜種は知られていない。なお，菅原･柿澤（1993）は，〝うすずみ〟をクロヅルの淡色化個体と同定している[10]。確かに，「黒鶴に而色淡き者」（『和漢三才図会』）の記述を文字通りに解釈すると，「黒鶴」の色が薄い個体，すなわちナベヅルの淡色化個体ということになろう。この場合，〝黒鶴〟と〝薄墨〟の体色の違いは個体差ということになり，種としてはナベヅルに変わりないため，亜種が存在しないナベヅルにも該当する。

しかし，〝薄墨〟という名称を与えられ，あえて「一種」として枠が設けられていることから，この名称がある特定の一種を担っていた可能性についても考えたい。そう考える一つの根拠として，「薄墨鶴」と呼ばれる種を実際に捕獲していた記録が確認できることが挙げられる[11]。捕獲記録を確認したのは，肥後国や対馬国であり，肥後国では寛永八(1631)年もしくは九(1632)

年・寛永十（1633）年・寛永十二（1635）年に「薄墨鶴（薄墨之鶴）」を捕獲している（『部分御旧記』[40]；『細川家文書』[41]）。また，対馬国では寛文十一（1671）年と寛文十二（1672）年に「薄墨鶴」の捕獲が記録されている（『対馬宗家文書毎日記』[42]）。以上 5 件の「薄墨鶴」は，単純にナベヅルの変色個体を表わす名称というよりは，ある特定の種を指す名称として用いられている印象がある。

「薄墨鶴」は実態が極めて曖昧であるため，本草書にのみ現われる〝実体のない種〟としての印象が強かった。しかしながら，このツルを実際に捕獲した事例を複数確認することができ，この場合の「薄墨鶴」は，明確に特定の種を担う名称として存在していた可能性が高いと考えられるのである。さらに，長門国では領内に産する産物として「マナツル」・「タンテウ」・「クロツル」と共に「ウススミ」の名を記載している（『長門産物名寄』[11；1737]）。たとえ変色個体であっても，同じ種を別々に産物として記載するとは考え難く，その上，別種として位置付けることができるほどに変色個体が多かったと考えるには些か無理がある。

江戸本草学における「〇〇の一種」の考え方については，『観文禽譜』[29；1831] で「しやむろ鶴」（ヒガシオオヅル）を「マナヅルの一種」とするように，〝薄墨〟は形態的に似ているなどの理由から，ナベヅルに類する種であると考えられていたものと推測できる。それでは，ナベヅルに相似するツルとは何であろうか。前節でも述べたが，内田・下村（1932）はクロヅルを「大体ナベヅルに似た鶴である」と記述している。さらに，〝薄墨〟はナベヅルよりも「色淡き者」であるという特徴を有する。この点から考えると，内田・下村（1932）がクロヅルの体色を「全体の色彩はナベヅルに比して淡く」と表現しているのは，〝薄墨〟に対する記述とも共通している。したがって，〝薄墨〟とはクロヅルを指す名称であった可能性が考えられる。しかしながら，〝薄墨〟について記載がある史料が限定的である上，形態に関する記述も極めて少なく，これを描いた図も確認できていないため，これ以上の考察は困難である。そのため，現時点では可能性の提示に留めるのみとする。

以上に述べた通り，〝薄墨〟はナベヅルの淡色化個体である可能性に加え，クロヅルを指す名称であった可能性を提示した。しかし，〝薄墨〟に関する情報は極めて少ないため，今後更なる情報の発掘が望まれる。ただし，実際に「薄墨鶴」を捕獲していた記録などが確認できることから，少なくとも江戸時代には，何らかの種を指す実体を持った存在として認識されていたことが明らかである。なお現在では，クロヅルは毎冬日本へ渡来するものの，渡来数はごく少数で稀な種である（茂田 1991）。〝薄墨〟がクロヅルを指していた場合でも，史料に記載される頻度や情報の少なさ，さらに前節でも言及した通りその分類も不安定であることから，江戸時代にも渡来数はさほど多くなかったことが推測できる。

3-4．霜降鶴

〝霜降鶴〟は，前節の〝薄墨〟と同様に，ナベヅルの属として『本草綱目啓蒙』[21；1806]

や『水谷禽譜』[24；1810]・『観文禽譜』[29；1831]・『成形図説鳥之部』[35；1849] などに記載されている。

一種奥州のシモフリ鶴も陽鳥の属なり（『本草綱目啓蒙』）

シモフリツル
陽鳥の属。奥州産。状マナツルに類。脚觜目クロツルに同じ。色陽鳥に比は淡黒色，尾に到りますます淡。又頂赤黒毛交る。頸背表白理あり。翅に鶴霜ふりに似る文色あり。尾は灰色。或云マナツルとクロツル相交て生るものならんと(『水谷禽譜』，図 15)。

図 15.『水谷禽譜』の「シモフリツル」(国立国会図書館所蔵)

しもふり鶴(啓蒙)
蘭山曰，形状は鶺鴒に類し，目と觜・脚とはクロヅルに異ならず。色クロヅルに較れば浅く，漸く尾に至りて灰色なり。頂は赤，黒毛相雑り，頸・項は白色，翼に白斑ありて鶴の霜ふりの如し。是も亦陽鳥の一種なり。南部侯の蔵図に載しは形マナヅルの如く，色は陽鳥に似て淡く，尾に至りて益々薄し。翅に鶴の霜ふりに似たる羽毛あり。故に名く。奥州にて或人の説に，鶺鴒と陽鳥と相交りて生ずといへりとあり。今按ずるに上に良安・蘭山等の謂所ウスズミと云ふ者もこれなるべし（『観文禽譜』）。

霜降鶴(シモフリツル)
形鶺鴒(マナツル)の如し。色は陽鳥(クロツル)に似て淡く，尾に至てますますうすし。翅に鶴(コウノトリ)の霜ふりに似たる羽毛あり。故に名ずく。奥州にあり。或人いへらく，鶺鴒と陽鳥と相交りて生ずるものならむ（『成形図説鳥之部』，図 16)。

図 16.『成形図説鳥之部』の「霜降鶴」(東京国立博物館所蔵)

〝薄墨〟と異なる点としては，〝霜降鶴〟には形態的特徴に関する記載がみられ，いくつかの図も確認できることである。また，〝霜降鶴〟を載せる各史料に共通して，本種は「奥州産」であることが示されている。しかし，陸奥国の産物帳などでは〝霜降鶴〟についての言及はなく，捕獲の記録も確認できていないため，「奥州産」に関しての詳細は不明である。一方で，紀伊国の産物帳に「霜降鶴，まれに来

ることあり」（『紀伊国続風土記』［31；1839］）との記載があることから，必ずしも奥州にのみ産するものではないと推測できる。

さらに〝霜降鶴〟とは，「鶺鴒と陽烏と相交りて生ずるもの」であると考えられていたことがわかる。すなわち「鶺鴒」（マナヅル）と「陽烏」（ナベヅル）の交雑種の意である。形態的にも「形鶺鴒の如し。色は陽烏に似て淡く」とある。「形」（あるいは「状」・「形状」）が意味するところは明確ではないが，両種の特徴を兼ね備えているように見えるということである。現在ではクロヅルとナベヅルの交雑種，いわゆる「ナベクロヅル」が知られている（安部 1991）。〝霜降鶴〟の「相交りて生ずるもの」を文字通りに解釈すると，これは交雑種を指したものであるといえよう。しかしながら，江戸時代にすでにツルの交雑種が確認されていたかどうかは明らかではなく，交雑種のもつ色彩は個体によっても大きく異なるため，ここでは可能性の一つとして留めることとする。

もう一つの可能性としては，『観文禽譜』にある「今按ずるに上に良安・蘭山等の謂所ウスズミと云ふ者もこれなるべし」の記述である。すなわち，前節で挙げた『倭漢三才図会』［9；1712］と『本草綱目啓蒙』で述べられている「ウスズミ」と〝霜降鶴〟は同一種であるという可能性である。本稿では〝薄墨〟をマナヅルの淡色化個体，あるいはクロヅルと推定した。菅原・柿澤（1993）は「『水谷禽譜』『梅園禽譜』の〝しもふりつる〟の図はナベヅルである」とし[12]，堀田（2006）は『観文禽譜』にある「かはりくろづる」と併せて，これは「クロヅルではなく，ナベヅルである」と同定している。

> 一種かはりくろづる，坂元某所獲。文化九年壬申二月十三日戸田五助組の鷹匠同心坂元某と云者，葛飾郡館野邑にて鷹にて捉りしを奉りしことあり。
> その形状頸より上白く，頂に淡紅の毛あり。背根淡黒きこと常のクロヅルの如にして，色稍淡く，頸より下，背・翅灰青，尾黒く青灰を帯，背淡黄褐，脚淡黒なり。前の霜ふり鬣に粗々合せり。同物にや。此二種皆陽烏の一種ならん（『観文禽譜』）。

図 17.『鳥類魚類之画　鳥之部』の「かはりくろづる」（（公財）山階鳥類研究所所蔵）

確かに，特に『鳥類魚類之図　鳥之部』［17；1800］の「かはりくろづる」の図（図 17）はナベヅルを描いたものであると理解できる[13]。一方，図 15 の『水谷禽譜』の「シモフリツル」は，ナベヅルとみなすには翼の色彩が淡色に過ぎ，またクロヅルの特徴も示していない。さらに，図 16 にある『成形図説鳥之部』の「霜降鶴」についても，クロヅルというよりはナベヅルに近い描写ではあるが，やはりナベヅルとみなすには「尾に至てますますうすし」と表現される大雨覆羽辺りから三列風切羽までの白色が過ぎる。

これらは，史料による表現上の誤差である可能性も考えられるが，特に『成形図説鳥之部』では，ナベヅルを描いた「陽烏」の図（図 11）は色彩がおよそ正確に描かれており，その上，「相交りて」の記述に従うように，先述の三列風切羽の表現は「鶴鷄」の図（図 1 ）の表現に相似している。こうしてみると，やはりこれらの〝霜降鶴〟は，ナベヅルではない何か他の種を描いたものである可能性が考えられる。

〝霜降鶴〟の体色を『観文禽譜』の記述からみていくと，これまで検討した種以外で色彩が近似しているものとしては，カナダヅル *G. canadensis* が検討対象の一つとして挙げられる。色彩表現の面から，史料と現代の図鑑類における記述を比較すると，〝霜降鶴〟とカナダヅルの色彩には相似する点がいくつか指摘できる。ただし，各部位とその名称の対応関係や色名の差異が明確でないという制限から，あくまでも参考程度に留める必要がある。両者の色彩のうち相似しているとみえるのは，体部や頭頂，項，翼，脚などである。全体的な体色としては，〝霜降鶴〟は〝くろづる〟（ナベヅル）に比べて「浅い」・「淡い」と表現され，例えば黒田・森岡（1989）のナベヅルとカナダヅルの場合でも，ナベヅルの「スレート灰色」（青みがかった濃灰色）よりもカナダヅルの「淡灰色」のほうが淡い表現になっている。頸部については，カナダヅルは全体の体色に近い色彩を示すが，〝霜降鶴〟はナベヅルと同様に白色となっている。しかし『成形図説鳥之部』の図では，図 16 の「霜降鶴」の頸部は図 11 の「陽烏」よりも白色の部分が小さく，項の下部辺りまでは体色と同様の色彩を示している。また，尾（三列風切羽）については，〝霜降鶴〟は「尾に至てますますうすし」とある通り灰色の記述になっているが，一方のカナダヅルでは色彩の変化は大きくない。しかしながら，「頂は赤，黒毛相雑り」とある記述は，「赤色を呈し，黒色の毛が点々とはえている」（清棲 1978）に類似し，「翼に白斑あり」も「各羽縁は多少淡色」（清棲 1978）で解釈できる。なお「鶴の霜ふり」[14] とは，「コウノトリの次列風切のいわゆる「霜フリ」の羽」（下坂 2009a）を指すと考えられ，おそらくはコウノトリの風切羽と大雨覆は黒色で，外弁は灰白色を呈する（清棲 1978）という色彩のことであろう。

以上のように，〝霜降鶴〟に用いられている表現とカナダヅルの特徴に相似する点を見出すことはできるが，〝霜降鶴〟がカナダヅルを指す名称であることを示すには，未だ根拠が十分ではない。しかしながら，シーボルトの『日本動物誌（Fauna Japonica）』[15] にはカナダヅルが記載されており（図 18），江戸時代の日本にカナダヅルが飛来していた事実を確認できる。また，堀田（2006）がカナダヅルもしくはその雑種と推測する，「あねはづる」の一種「ふがはり」というツルも『観文禽譜』に記載がある。

図 18.『日本動物誌』の「カナダヅル」

一種あねはづる彪がはり，或人の蔵図にあり。形状総て前の如くにして，頭及觜際より喉えかけ黒く，皆より頸えかけ白し。背及胸・腹倶に灰色。尾端黒く，觜・脚淡黒なり。おもふにア子ハヅルの未だ毳せざる者を写せしならん歟(『観文禽譜』)。

図 19.『鳥類魚類之画　鳥之部』の「あねはつる一種」((公財)山階鳥類研究所所蔵)

『鳥類魚類之画　鳥之部』には本種を描いた図が記載されている(図 19)。同時代の日本でカナダヅルを目撃する機会は皆無ではなく，しかしカナダヅルを表わしたとみられる名称がほとんど知られていないことに留意すると，現時点では明言にまで至らないものの，〝霜降鶴〟の名称が示す一つの候補としてカナダヅルを指摘しても良いであろう。

本節で検討した通り，〝霜降鶴〟とは，従来の指摘ではナベヅルを指すといわれてきた。一方で，「陽鳥の属」としながらも別の「一種」として記載しようとする様子から，これをナベヅル以外の種を指す名称として解釈することも可能である。史料上の記載を文字通り解釈するならば交雑種，共通する点を指摘していく方法ではカナダヅルが可能性として提示できる。しかし，これを明言するだけの材料が揃っておらず，可能性の一つとして推測の域を出ないのが実状である。今後さらに情報が追加されることによって，より詳細な検討を行うことが可能になると考えている。

4．まとめ

本稿では，史料上に記載されたツル類の名称からの種の同定を目的として，マナヅル・ナベヅルに関連する〝真鶴〟，〝黒鶴〟，〝薄墨〟，〝霜降鶴〟の四つの名称について考察を行った。

〝真鶴〟や〝鶴鷄〟と記載される名称は，およそ現在のマナヅルを指し，方言として〝ねづみづる〟や〝なべづる〟・〝まなとり〟・〝蒼鶴〟の別名があることが確認できた。また，江戸本草学では，形態や色彩などの相似から「一種」とみなす考え方があり，ヒガシオオヅルを「鶴鷄の一種」として位置付ける事例もみられた。マナヅルには「二品」が存在するという記述がみられるが，これはヒガシオオヅルの存在とも関係していると考えられる。

〝黒鶴〟あるいは〝陽鳥〟は，ナベヅルを表わす名称として用いられていた。和名として〝きぬかづき〟の名称もみられ，これは〝衣被き〟の意であると推測できる。ナベヅルを表わす〝なべづる〟の記載も確認できるものの，史料上に記載される頻度から考えると，この名称は当時あまり一般的ではなかったようだ。一方で，ナベヅル以外の種を表わしていると思われる〝なべづる〟の名称がみられ，これはクロヅルを指したのではないかという一つの可能性を提示し

た。クロヅルに関しては，明らかにクロヅルであるという史料を明確には示せないものの，これを示唆する若干の記述がみられた。その上で，本稿では，ナベヅルに関連させる形でクロヅルについて記載されるようになったと推測した。

〝黒鶴〟の一種として記載されている〝薄墨〟の名称も，クロヅルを指していた可能性を提示した。あるいは，ナベヅルの淡色化個体を指すことも考えられるが，これを実際に捕獲した記録や産物帳にも記載がみられることから，特定の一種を担っていた可能性が少なくない。ただし，〝薄墨〟については史料上の記載が少なく，現時点では考察を深化させるのは困難である。

〝霜降鶴〟は〝薄墨〟と同様に〝黒鶴〟の一種として位置付けられ，これもいくつかの可能性を提示するのみに留めた。史料上の記載を文字通りに解釈すると，〝霜降鶴〟は交雑種を示したということになる。加えて本稿では，カナダヅルを指した可能性についても指摘した。

久井（2013）は，「江戸時代のツル類の分類には混乱や揺らぎ，地域差などがみられる」と述べているが，マナヅルとナベヅルに関しては，さほど大きな混乱や揺らぎは確認されなかった。江戸時代ではマナヅルやナベヅルが一般的な種として存在しており，実際に観察する機会や多くの情報が得られていたためであると推測できる。他方，〝黒鶴〟に交じるクロヅルのようなツルや，〝薄墨〟あるいは〝霜降鶴〟では，現時点では同定しきれない曖昧さがみられた。これらの名称がある特定の種を担っていた場合でも，マナヅルやナベヅルに比べて存在自体が稀であったと考えられ，これらの名称に対する記載の曖昧さは，本草学者自身が持っていた情報の少なさや不確実さにも起因すると推測できる。ただし，マナヅルやナベヅルに関連する名称についても，想定される種が史料によって異なる場合も確認できる。そのため，北村（1949）が「箇々の書について別々に考究すべきである」と述べるとおり，たとえ同一の名称であっても，史料上の記載を個々に解釈していく必要がある。地域差に関しては，マナヅルやナベヅルの事例でも方言名がみられることが明らかとなった。

本稿では，文献史料を用いた研究を進めるにあたっての基礎作業として，江戸時代のツル類の名称を整理した。久井（2013）で扱ったタンチョウに関する名称に続き，マナヅルとナベヅルに関する名称について検討し，結果としてクロヅルやカナダヅルにも言及することとなった。しかし，今回検討した四つの名称についても，新たな史料による情報の追加が期待できるため，今後も継続して調査を行うこととする。さらに，これまでに言及していない〝あねはづる〟や〝暹羅鶴〟，〝花頂鶴〟などの名称に関しては，稿を改めて報告したいと考えている。

最後に，資料の閲覧・掲載に際して，公益財団法人東洋文庫の山村義照氏，公益財団法人山階鳥類研究所の鶴見みや古氏には多大なる御高配を賜った。ここに厚く謝意を表する。

（ひさい　あつよ・歴史地域文化学専攻）

註

1　日本の本草学は中国の本草書『本草綱目』を軸として展開するが，本格的な「日本的本草学」の基礎を築いたのは貝原益軒の『大和本草』である。『大和本草』は日本の動植物や民俗などを素材とし，『本草綱目』とは別の「新しい日本の本草学」を樹立せんとした労作であると評価される（杉本 2011）。そのため本稿では，主に『大和本草』以降の史料を対象として検討を行った。

2　諸国産物帳とは，江戸時代中期の享保～元文年間にかけて，幕府が丹羽正伯に命じて実施した全国的な産物調査の報告書である。本稿では，盛永・安田（1985～2003）『享保・元文諸国産物帳集成』全 21 巻および安田（1997～2005）『江戸後期諸国産物帳集成』全 20 巻に掲載される産物帳を使用した。産物帳は，厳密には享保～元文年間に行われた調査報告書を指すが，その後も全国各地で博物誌や産物誌が作成されており，本稿では後者の史料も産物帳として扱った。

3　羽箒に使われるツルは「真鶴」だけではなく，「玄鶴」，「黒鶴」，「丹頂」，「白鶴」，「姉羽鶴」などがある（下坂 2009a）。

4　ただし，当時はアネハヅルも「形色はマナヅルに似たり」（『大和本草』），「鶴鷄の類」（『大和本草会識』）と考えられていたため，同類の認識は曖昧なものであったといえる。

5　菅原・柿澤（1993）は「陽鳥」〈ようちょう〉と記載しているが，当時の史料によると，正しくは「陽烏」〈ようう〉である。

6　菅原・柿澤（1993）が挙げている『禽鏡』については筆者は未見であるが，菅原・柿澤（1993）にある，『禽鏡』に記載された鳥名の一覧には〝黒鶴〟の名がなく，詳細は不明である。

7　菅原・柿澤（1993）が挙げている『唐紅毛渡鳥写生帖』を確認したが，〝陽烏〟に該当する図は確認できなかった。菅原・柿澤（1993）にある，『唐紅毛渡鳥写生帖』に記載された鳥名の一覧にも〝陽烏〟の名はなく，詳細は不明である。

8　『梅園禽譜』は典型的な実写型図譜（転写ではなく，本人が実写したもの）であり（磯野 1995），「陽烏」についても真写した日時（天保七年三月廿六日）と場所（山下辺の花鳥茶屋）が明記されている。そのため，『啓蒙禽譜』はこの『梅園禽譜』を転写したものと推測する（久井 2013）。

9　久井（2013）は，〝琉球鶴〟について「ある特定の一種を指す名称ではなく，琉球を経て日本へ入ってきた外国のツルの総称」であると推測している。

10　菅原・柿澤（1993）は，『本草綱目啓蒙』の「クロツル　一種色浅き者をウスズミと云」の記述から，〝うすずみ〟をクロヅルの淡色化個体と同定している。しかし，菅原・柿澤（1993）は，〝くろづる〟についての項で『本草綱目啓蒙』の「クロツル」をナベヅルと同定している。そのため，『本草綱目啓蒙』の「ウスズミ」を「クロツル」の淡色化個体と解釈するのであれば，これはクロヅルの淡色化ではなく，ナベヅルの淡色化個体とみなすのが適切であると考えられる。

11　同一史料中に「薄黒鶴」という名称が記載されている場合があるが，これは「薄墨鶴」と同種であると解釈した。

12　菅原・柿澤（1993）は「『梅園禽譜』の〝しもふりつる〟」と記すが，筆者が確認する限り『梅園禽譜』に〝霜降鶴〟の図はみられなかった。

13　「かはりくろづる」の名称に関して，堀田（2006）は「カワリクロヅルという呼称は，畳んだ際に尾のように見える翼の風切が，体に対して黒みが強いことによるのだろう。これは成鳥でとくにはっきりするのだが，この図の鳥がとくに際立ってそのように見えるのは，個体差と考えるべきだろう」と述べている。

14　『水谷禽譜』では「鸛」ではなく「鶴霜ふり」の記述となっている。

15　1823～1830 年の間にシーボルトによって日本から収集された日本産動物の観察と図示であり，鳥

類篇 Aves は 1844～1850 年に編集された（山階 1984）。

参考文献

安部直哉　1991「日本のツル―九州のツル」正富弘之（監修）『青い星のツルたち』pp.73-82　札幌：野生生物情報センター.

磯野直秀　1995「江戸時代動物図譜における転写」山本慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界』上，pp.299-333，京都：思文閣出版.

植田睦之　2009「一極集中化と分散」山岸哲編著『日本の希少鳥類を守る』pp.278-280，京都：京都大学学術出版会.

内田清之助・下村兼二　1932『原色鳥類図譜』東京：三省堂.

岡田信利（編）　1891『日本動物総目録』東京：金港堂.

北村四郎　1949「本草植物の植物分類地理学に依る同定」『生薬』2：1-4.

北村四郎　1985『北村四郎選集 II　本草の植物　漢名と和名，学名との同定』大阪：保育社.

清棲幸保　1978.『日本鳥類大図鑑』増補改訂版，東京：講談社.

黒田長礼　1934『鳥類原色大図説』第三巻，東京：修教社書院.

黒田長久・森岡弘之　1989『世界の動物　分類と飼育 10-II〔ツル目〕』東京：東京都動物園協会.

茂田良光　1991「世界のツル」正富弘之（監修）『青い星のツルたち』pp.1-16，札幌：野生生物情報センター.

島田勇雄　1967a「近世本草書における和名と方言（一）―ボラとメナダ―」『近代』40：1-30.

島田勇雄　1967b「近世本草書における，和名と方言（二）―イシモチとニベ―」『近代』41：49-88.

島田勇雄　1968「近世本草書における，和名と方言（三）―鱧魚について―」『近代』42：43-72.

下坂玉起　2009a「羽箒と茶人―形態から見る羽箒への思い入れ―」『野村美術館』(18)：81-98.

下坂玉起　2009b「羽箒について②流祖・山田宗徧作　桑柄一ツ羽の魅力」『宗徧流知温』607：6-10.

菅原浩・柿澤亮三（編著）　1993『図説日本鳥名由来辞典』東京：柏書房.

杉本つとむ　2011『日本本草学の世界―自然・医薬・民俗語彙の探究―』東京：八坂書房.

鷹司信輔　1917『飼ひ鳥』東京：裳華房.

千羽晋示　1996「鹿児島県出水平野におけるツル類の基礎調査　第 34 報「大型鳥類等による農産物被害防止等を目的とした個体群管理手法及び防止技術」に関する研究（5 年間のまとめ）」『自然教育園報告』27：43-54.

動物命名法国際審議会　2005『国際動物命名規約　第 4 版日本語版〔増補〕』東京：日本分類学会連合.

長濱兼吉　1893「本邦保護鳥類」『動物学雑誌』5(51)：8-15.

中林広一　2007「「穀」考―中国史における「穀」分類をめぐって―」『上智史學』52：39-65.

日本生態学会生態系管理専門委員会　2005「自然再生事業指針」『保全生態学研究』10：63-75.

久井貴世　2011「タンチョウと人との関係史―江戸時代におけるツル類の分類，分布と季節移動―」（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程研究論文Ⅰ）.

久井貴世　2013「江戸時代の文献史料に記載されるツル類の同定―タンチョウに係る名称の再考察―」『山階鳥類学雑誌』45：9-38.

堀田正敦（鈴木道男編著）　2006『江戸鳥類大図鑑　よみがえる江戸鳥学の精華『観文禽譜』』東京：平凡社.

正富宏之・正富欣之　2009「タンチョウと共存するためにこれから何をすべきか」『保全生態学研究』14：223-242.

水野寿夫・飯沼宗和・水野瑞夫　1987「山豆根に関する本草学的研究」『岐阜薬科大学紀要』(36)：26-31.
宮崎貞巳・田代洋丞　1992「江戸時代の農書及び本草書類に記載されているサトイモの品種及び品種群について」『佐賀大学農学部彙報』72：1-36.
モリソン M.L.（梶光一・神崎伸夫監修，江成広斗・須田知樹監訳）　2007『生息地復元のための野生動物学』東京：朝倉書店.
盛永俊太郎・安田健（編）　1985-2003『享保元文諸国産物帳集成』第 1 巻-第 21 巻．東京：科学書院.
安田健（編）　1997-2005『江戸後期諸国産物帳集成』第 1 巻-第 20 巻，東京：科学書院.
山階芳麿（監修・解説）　1984『シーボルト日本鳥類図譜』東京：文有.
吉岡幸雄　2000『日本の色辞典』東京：紫紅社.